巻頭座談会

哲学対話とは何か

河野哲也 KONO Tetsuya　齋藤元紀 SAITO Motoki
戸谷洋志 TOYA Hiroshi　永井玲衣 NAGAI Rei
司会：渡名喜庸哲

近年、大学だけでなく小中高等学校、あるいは社会のさまざまな場所で、「哲学対話」ないし「哲学カフェ」といった取り組みが広まっている。「哲学対話」とは、哲学者の名前や概念など哲学史の知識を一切必要とせず、「自由とは何か」、「働くとは何か」といった問いをめぐって、10名前後のグループでの対話を通じて考えを深める実践である。「相手の話を否定や揶揄しない」、「その限り何を発言しても自由」といったいくつかのルールがあり、ファシリテーターの進行のもとで対話が行われるが、なんらかの結論や意見の良し悪しを求めるものではない。対話を通じて思考を深めることがその目的である。立教大学でも文学部教育学科では河野哲也氏を中心に講義や演習にて「哲学対話」の取り組みがなされており、また2019年度より全学共通科目にて「哲学対話 in Rikkyo」が開講された。「哲学対話」とは何か、大学での「哲学対話」の実践の意義や課題は何かをめぐり、これまで「哲学対話」にさまざまなかたちで関わってきた四名の論者にお話を伺った。

本日の主題

渡名喜　本日は四名の方をお招きして「哲学対話とは何か」をテーマにお話を頂きたいと思っています。最近、「哲学対話」というものの知名度がかなり高くなってきており、これまで以上に市民権を得ています。「哲学カフェ」ですとか、学校教育における「子どものための哲学」ですとか、さまざまな実践が広まっています。今回は、まさにそうした実践の渦中にいらっしゃる方々をお招きして、哲学対話とはどういうものか、その意義はどこにあるのかを伺いたくてこのような座談会の場を設けさせていただきました。

私自身も今年度から、立教の全学共通科目のなかで、今いらっしゃる齋藤元紀先生のお力をお借りして、合同で「哲学対話in Rikkyo」という科目を担当しています（授業自体は2019年に開講）。履修学生も百名を超え、学生の関心も非常に高いことを実感しています。こうした授業実践を今後どう発展させていくべきかについても、

皆様のお知恵がとても参考になると思っています。

本日お招きしたのは、以下の四名の方です。

まず、まさにこの哲学対話、とりわけ教育の現場における哲学対話の実践を主導していらっしゃる、本学の文学部の学部長でもいらっしゃいます河野哲也先生です。河野先生は、哲学対話ないし子どものための哲学についてはさまざまなご著書がありますが、とりわけ『ゼロから始める哲学対話』という哲学対話の教科書のような本もお出しになっています。二人目は、同書にも寄稿していらして、また、高千穂大学で「パイデイア哲学カフェ」という哲学対話のサークルを組織なさっている齋藤元紀先生です。三人目は、現在、関西外国語大学で教えていらっしゃる戸谷洋志先生です。J-popについての哲学から、ハンス・ヨナスの倫理学、原子力の哲学まで幅広く研究なさっている方です。戸谷先生は哲学対話の実践も精力的になさっていると伺っておりまして、ぜひ、どういう実践をなさっていて、そこでどういう問題を抱えていらっしゃるのか、今後どうなさっていくのかということをお伺いしたくて、本日お声がけをさせていただきました。四人目は、永井玲衣先生で、最近公刊された『水中の哲学者たち』がかなりのヒットとなりましたが、哲学対話の実践を長く続けてこられた方です。立教大学の全学共通科目でも「教育学への扉」を担当頂いておりまして、そこでも哲学対話の実践をなさっていらっしゃると伺っています。

私の話はここまでにして、本日皆さんにお伺いしたいと思っているのは、先ほど若干紹介させていただきましたけれども、哲学対話ということでどういう実践をなさっているのか、そこにどういう意義を込めていらっしゃるのか、あるいは逆に、現在哲学対話が直面している課題とか問題点をどのように見ていらっしゃるのか、という点です。それから、この企画自体が大学院の紀要向けの座談会であるといことにも関係します。おそらく哲学対話というのは、さまざまな場所に接続すると思いますが、とりわけ大学における哲学教育という場合にどういったことが考えられるのか。皆様の考えを伺いたいと思っています。

ただ、以上はあくまで仮のものですので、ぜひ「いや、そっちよりはこっちのテーマの方が良い」とか、さまざまに「暴走」していただくのもむしろ哲学対話の醍醐味ではないかとも思います。以上

はあくまで仮の設定として、ご自由にお話を頂ければと思っております。

それではまず河野先生、よろしくお願いいたします。

哲学対話の意義

河野　最初からひっくり返しのようで申し訳ないんですけど、哲学対話は、「哲学プラクティス」という別の呼び方もするのですけど、何が哲学で何がそうでないかについてあんまり明確な線引きしなくていいんじゃないのかなと思うのですよね。そもそも、最近は自分を「哲学者」と呼ぶのもやめていて、「何者でもない人」みたいに思っています。「何をやってるんですか？」といわれて「人助けです」みたいな、そういう感じに最近なっているので、なんでもいいのではないかなと思うんです。哲学対話は一種の話し合いであることは間違いないんですけども、哲学的かどうかのアイデンティティについては基本的にあまり問う必要はないのではないかと思います。ただ、対話的な活動をどのように実践していますかという点と、普通に話すよりも一つのテーマについてしつこく話し合うようなことをやってますかという点など、いくつかのところでは通常の会話とは区別をしています。そこを最初にお話ししていいかなと思っています。自分の活動は大きく言うと二種類あります。一つは大人向けです。今中心的にやっているのは、地域創生のための対話です。この前には福島県のある村でトンネルを開通させて地域おこしをするという計画があり、そこで対話の実践を行いました。そもそもその村ってどういう村だろうとか、みんなにとってこの自然とか地域ってなんのためにあるんだろうとか、そういう自分たちの地域とか自然とか文化というのを振り返るというようなもので、こうした対話を行うことが多いです。これがまず大人向けの、大きな枠で言うと地域創生の対話です。もう一つ、子ども向けの、教育的な対話の実践で、下は保育園、幼稚園、こども園から上は高校生まで、いろんな形で実施しています。主に活動場所は三つくらいあって、一つは学校です。大体学校に呼ばれて、高校だと総合的な探求の時間がやっぱり最近みんな気になっているらしくて、今日も実を言うとその

話し合いがありました。探求の時間に対話的なものを入れて、テーマを深めながらじゃないと表面的な探求になりがちなので、もっと深く自分を考えて大きなテーマを扱うための探求をするという、高校生の探求学習の一環です。それからもう一つは、図書館での対話です。小学校の子ども図書館など、図書館で子ども同士とか大人で、大人と子どもの対話というのを取り持つという実践をしています。この活動は、永井さんにもずっと付き合っていただいています。三つ目は美術館です。この間は、新潟県南魚沼市の池田記念美術館で対話をしてきました。ちょっと東京みたいな大きな都市だとピンとこない部分があるかもしれないんですけど、地方だと図書館とか美術館って、その地域をつなぐすごく重要な文化スポットなんですよね。ここに例えば作品を作った作家さん、美術館関係者、そして子どもたちが集って対話をすることによって、もちろん地域の教育になっています。でもそれ以前にも、作家さんたちが真剣に保育園児と話し合うシーンは見ていてスリリングというかですね、冷や汗が出るような鋭さがあるんですよね。この前も、子どもは容赦ないというか、「こんなもの描いて何になるんですか？」みたいな質問をして、抽象画を描いてる作家の先生が、怒り気味にバーンとすごい真剣な言葉を発すると、それで子どもから返ってくるのが、とぼけたような味わいの発言でして、いい意味でひやひやするのです。このひやひや感が何ともたまらずいいなと思ってしまいます。私もファシリテータをしていて楽しいですね。このような形でいくつかの場所で哲学対話の実践をしております。地域創生を中心とした大人の哲学カフェ、まあ企業に行くときもありますけど、あとは学校とか図書館、美術館などで行っている教育的な対話です。大学についてはまたあとで。以上です。

渡名喜　どうもありがとうございます。齋藤先生、いかがでしょうか。

齋藤　はい。私が行なっているのは、主として二つぐらいの活動です。一つは社会人、一般の方々向けのもの、もう一つは大学ということになります。社会人一般向けの方々でやっている対話は、カルチャースクールとかそういうところが中心です。そこに来られる方は、年配の方が非常に多くて、最初は「よくわからないんだけどとりあえず哲学っていう名前に惹かれてやってきました」っていう

人が多いんですけれど、徐々に対話を重ねていくにつれて、こちら側が驚くような思考を展開していって、いろいろ話をしてくださるんですね。もちろん、人生長く生きてるとか短く生きているとかいったことは、哲学的な思考には基本的に関係ないというところはあるんですけども、先ほど河野さんがおっしゃったように、ちっちゃい子どもであればあるほど何の前提もなく鋭い問いを出すということがあります。逆に年配の方々になると、それなりの人生の味わいというか、重みのあるさまざまな経験をしていらっしゃって、これはこれで、そういう経験をもとにお話しいただくことで、予想外の思考を展開していくといったことがあります。長い人生経験を経て作り上げた前提をご自身で崩しながら思考を深めていくという作業はなかなかできるものではなく、そうした思考の強靱さには深く感銘を受けます。やはり人間の生き様って変わらずこういう側面があるんだなとか、歳を重ねて老いていくとこういう考え方も出て来るのかな、といった、そういう発見に僕自身もさまざま気づかされるところがたくさんあります。それともう一つは、僕の本務校の高千穂大学というところを拠点にして、学生たちが中心となって行っている対話の活動です。杉並の井の頭線沿いに大学があるので、近隣の大学さんの学生さんと一緒になって行なったりとか、あるいは杉並区に本拠地を置くようなさまざまな団体さんなんかと一緒に行ったりしてきました。コロナ禍の前の段階でも、各大学の対話サークルが大学横断型でお互い話をするという機会が少なかったので、非常に盛り上がりました。今はオンラインで月一回くらいのペースで対話をやってるんですが、そこに来るのは意外にも学生より社会人の方々が非常に多い。年配の方もいらっしゃいますし、普通に仕事を持たれている方もいらっしゃって、非常に和気あいあいと対話が進んでいるような状況です。地域と組んだ例としては、杉並に本拠地をもつ日本フィルハーモニー交響楽団とコラボレーションをして、実際にプロの方に演奏していただいて、それを聞いて対話をするということもやりました。ジョン・ケージの「4分33秒」のような作品を実際にプロの方にやっていただくというようなことも行なったりもしました。演奏者の方々と聴衆お互いそれぞれの立場からいろいろしゃべってみると、これまた作品の見え方がいろいろと変わってくる。以上、これら二つの活動が主たるものです。

渡名喜　ありがとうございます。面白いですね。オーケストラとも一緒にやるということがあるのですね。またその話は追ってぜひいろいろ伺いたいと思いますが、次に戸谷先生のお話しを伺いたいと思います。

戸谷　私は今までの経験というとほとんどが大学の外ですね。町というか、誰でも参加できる場所で不特定多数の参加者を募るような形で哲学カフェをやってきました。大学院に在学しているころから哲学カフェの進行役をやり始めて、最初は千葉県にあるMOONLIGHT BOOKSTOREという古本屋さんを使わせてもらいました。その後も、哲学カフェの意義をご理解いただけている方に場所をお借りして、定期的に開催するというようなことをやってまいりました。京都のカルチャースクールのGACCOHという場所でも定期的に哲学カフェをしています。町の中で哲学カフェをしていてとても面白いのは、誰が来るかわからないということですね。ついさっきまで全くの赤の他人だった人たちが集まって愛とか正義とかについて自分の考えを語り合うというのは、見ているとある意味では不思議な光景でもあるし、また、問いをみんなで探求していくなかで、さっきまで他人だった人たちの間に徐々にコミュニティが作られていくというか、一つのものを共に作り上げていくような関係性がだんだんと芽生えていくような感覚が、とても素敵だなぁと思っています。そうした場に立ち会えるということが私にとっては大きなモチベーションですね。また、特にコロナ禍以降は、「技術の哲学カフェ」というオンラインの哲学カフェを個人で主催しています。そこでは毎回技術に関連するトピックをテーマにした哲学カフェを繰り返しています。まあ、技術といっても、ゲノム編集などの先端的なテクノロジーというよりかは、何かを作るという営みをテーマにしています。つい先日は料理をテーマにした哲学カフェをしまして、ここでもいろいろな意見が出て来て面白かったです。技術とかテクノロジーに関するパブリックエンゲージメント[1]というんでしょうか、市民間での共同参画のようなイベントとしては、サイエンスカフェなどがこれまでは有名だったと思います。ただ、サイエンスカフェでは基本的に専門家の方の話が入るので、どうしても非対称的な構造があるなというのは前から気になっていたところで、テクノロジーとか技術をテーマにしながら開かれた対話、市民

間でも開かれた対話を進めていくにはどうしたらいいのかなということを個人的にずっと考えていました。まだ自分のなかでは完成形ではないのですが、「技術の哲学カフェ」をそういう新しいパブリックエンゲージメントの形に育てていきたいなと個人的に思って進めているところです。

渡名喜　どうもありがとうございました。「技術の哲学カフェ」をなさっているというのは伺っていたのですが、今の話を聞いて、すごく興味を覚えます。これまでのリスク・コミュニケーションを乗り越えるような射程を有しているかもしれないという印象も受けました。では、永井先生、お願いできますでしょうか。

永井　私は、哲学は場所を選ばないところがいいと思っていて、むしろ今は、いろんな場所で試してみようという気持で活動しているような気がします。小学校、中学校、高校で出前授業をすることもありますし、大学で、立教大学でも兼任講師をさせていただいていますけれども、大学生と一緒にやってもいます。まちでの哲学カフェや、寺社、ビジネスのなかでの哲学対話というのも行っています。最後に、これはちょっと変わり種なんですけれども、メディアのなかでも対話の場を開くということは最近試しています。哲学対話とは明言はしていませんが、市民メディアなどで、問いを中心とした対話の場を開くような配信を行なったりして、そこで忌避されやすい政治的な議論だとか社会問題について、広くみんなと、大丈夫って思えるような場で問えたり考えたり悩んだりできるような場を開くということもしています。

渡名喜　どうもありがとうございました。皆様お話を聞いていろいろお伺いしたいことはありますが、先ほど河野先生が大学の話はまた後でとおっしゃっていました。大学での活動に加え哲学対話の国際的な広がりというのも河野先生が主導なさっていると思いますが、その辺についても補足いただけないでしょうか。

河野　大学だとですね、普通の授業で、私の授業自体が哲学対話みたいな感じがします。大学の授業では学生にプレゼンをやってもらうことはあると思いますが、普通、例えば15分くらいプレゼンしてもらうと5分質問応答で終わるじゃないですか。それを逆に15分発表してあと45分ディスカッションしてもらいます。最初は哲学のテクストを使い、その後みんなで「なぜなぜ攻撃」[2]をしてです

ね、そうするとしばらく経ってくるとみんなお互いになぜなぜ攻撃をするようになるので、そうすると自然と考えも対話内容も深まってきます。自慢するわけじゃないですけど、私のゼミで1年間くらいこれをやると自然に小学校へいっても子どもの哲学ができるようになると思います。ですので、このスキルは色んな場面で使えるかなと思います。

渡名喜　国際的なほうについてはいかがでしょう。

河野　2022年の8月5日から11日まで、「子どもの哲学国際学会」という子どもの哲学の最大の国際学会を立教大学に招致することにいたしました。教室を超えていく哲学、教室外で哲学対話していくというのはどういう活動なのだろうかが、大会のテーマとなります。かなりの数の応募がありました。観光ツアーもあり、6日から7日がプレカンファレンスワークショップでいろんな国からのワークショップがあります。アメリカ一つ、南米から一つ、日本が二つで、もう一つは東南アジアからも一つあります。そこでいろんな実験的なワークショップをやってもらいます。それで、8日から11日が普通の学会になります。テーマは先ほど言った、「教室を超えていく」子どもの哲学となります。現在学会の会長はイスラエルの方なんですけども、多文化的な、多宗教的な対話を実践している人で、まさに教室外で、子どもの哲学を実践しているような方だと思います。ハイブリッドでも行いますので、ぜひ来年、立教にいらっしゃってもオンラインでも結構ですので、見にいらしてください。世界では、とても自由な形でいろいろな実践がなされていることがわかると思います。日本人はどうしても、何であれ、「正しい唯一の形」があると思う人が多いのではないかと思います。「これが正しい形だ」ってお作法みたいに考えてしまう。海外の方が来ると、逆にいい意味でのいい加減さというかちゃらんぽらんさが花咲いてですね、とても面白いことになると思います。ぜひそういう活動を見て、目を開いてもらうためにですね、参加してほしいなと思ってます。

渡名喜　今も少し紹介してくださいましたように、国際的にこんなに哲学対話が展開されているとのことですが、やはり日本における哲学対話と他の国での哲学対話は、傾向といいますか雰囲気といいますか、同じところと違うところがある気もします。どういうふうに見ていらっしゃいますか。

河野　基本そんなに変わらない気はします。学校でやるときには、学校の制度や文化がバリアーになる傾向があるのですが、これも各国で似たような事情のようです。ハワイにいるジャクソン先生というカリスマ的なP4C（Philosophy for Children）の教授がいるのですけれども、彼はいつもニコニコして決して人の悪口を言わないような人なのだけど、私には本音を話してくださいました。そこで、「実を言うとアメリカでも学校の先生ってホント固くて、やっぱり何か教え込もうとする傾向が強くてね、そこを崩すのが大変だった。今でも大変なんだよ」ということを言ってくれました。そうした点は、日本だけでなく、他の国もそうだと思うのです。学校という近代的な制度の問題点は、国際的にも似ているところがあると思います。ただ、日本に無くて外国にある特徴と言えば、そうですね、例えば私がカンボジアなんかに行って感じたのは、コミュニティボール[3]を使えないんですよね。何でだと思います？　人に投げて物を渡すのは大変に失礼な行為だと思われているのですね。あと仏教のお坊さんがその場にいると、そのお坊さんの発言を尊重して、他の人が話さないという傾向もあります。これは、一種の権威主義なんですけれども、その国の特徴は、どこと比較するかで随分と異なって見えると思います。日本人はあまり対話で発言しないと言いますが、別にP4Cをやってる限り、あるいは哲学カフェをやってる限りそんなに他の国と変わらないような気がします。僕はアメリカの大学に行くことも多いんですけど、アメリカの学生や院生はスピークアウトすることはできるけど、ダイアローグは特にうまいとは感じないです。スピークアウトして、そのエビデンスを出してくることは得意だけど、そこからディスカッションして相互に考えを深めていくことに関しては、そんなに特別にうまくないというか、あんまり日本と変わらないように思います。むしろ日本の方がいいんじゃないかと思ったりする時さえあります。それぞれの国の細かな違いはあるんですけど、大まかに言うとそんなに変わらないような気がしますよね。私が鈍いのかもしれないけど。

渡名喜　どうもありがとうございました。齋藤さんに、先ほどだいたいご活動についてお話いただきましたけれども、ここがやはり哲学対話の意義だと考えていらっしゃることについて改めてお聞かせください。

齋藤　そうですね、先ほど社会人の方と大学生という二つの活動が主なものだというふうに申し上げましたが、以前には銀座でオフィスを貸してくださるところがあって、そこの会議室を根城にして対話の活動もしていました。大学ではやはり世代が非常に近しいので、同じ意見で集約していくような傾向が若干強くなるところが感じられます。それに比べると、大学の外、教室の外に行くと、多種多様な方々が入ってくる。先ほど戸谷さんもお話しされてましたが、全然今まで知らなかった人が入ってきて話ができる。そこで思考がさまざまに活性化されたり、刺激を受けるというところも大いにあるんじゃないかと思います。その点で言えば、対話を誘発していくというか、一方的に自分の考えだけを話すのではなくて、こういう考えがあったらどうなのかとか、あるいは別な角度から見たときにどういうふうに考えていけばいいのかとか、思考が深められていく、あるいは思考が別様になっていくチャンスに遭遇することになるというのは、哲学対話の意義だと思います。教室のなかでやるときには、教員側がファシリテーターの役をやらなければならない場合があるのですが、できるかぎりそういう役回りを引き受けないようにしていけばいくほど、学生たちの方は自由にどんどんしゃべって自分の思考を深めるようになっていく。これは対話にとって必要なところかなと思っています。学生はみんなそれぞれに自分の考えていることがあって、本当はしゃべりたくてしょうがないんだけれども、授業や講義なんかでやっているのはある種の言論封殺というか、学生にあんまりしゃべらないようにさせて彼らの思考を停止させてしまう。そういう側面が裏側ではあるんじゃないのかな、なんていうことも時おり授業をやっていると感じることがあります。

渡名喜　耳が痛いお話しですね（笑）。一点お伺いしたいのは、さっき高千穂大学の学生さんたちが主導でなさっている会に、最近では実は社会人の方の参加が多くなってきているとおっしゃっていましたが、社会人の方は、そこに何を求めて来ていると思われますか。

齋藤　何を求めているんでしょうね。ただ話したいだけじゃないかな、って思うんですけど（笑）。特にコロナ禍になってオンラインが広まったおかげで、逆に対話への参加の精神的な障壁や場所的な制約がなくなった。そのおかげで、年齢層も本当にばらばら、地域もばらばら、日本全国から、それこそ海外からも、情報を見た人が

「ちょっとお話ししたいな」と対話に参加してくださるようになりました。そういう場所が出来上がったおかげで、対話が非常にやりやすくなりましたし、非常に面白い場所にもなっているかなと思います。対面には対面の良さはもちろんあるんですけれども、オンラインにもオンラインの良さがあると思います。異質な見解がたくさん拾える場所ができるというところは、大いにプラスにはなっているんじゃないかと思います。

渡名喜　なるほど。オンラインと対面というのも重要な論点だと思いますが、今の話では、学生が主体で大学でやっているイベントに社会人がやってくるというのは一般的には非常に特異にも見えます。そういう意味でも哲学対話の試みは面白いですね。

齋藤　そうですね。今までの傾向として、毎回問いのテーマを一応決めていますが、例えば「自信って何だろうか」というテーマのときには、その問いを出した学生がファシリテータを務めます。そこでその学生が「私こういう点を疑問に思ってまして」みたいな話をすると、それはどういうことなんだろうって言って、その問いからちょっと人生相談的な展開になったり、「こういうふうに考えたらいいんだよ」という人もいたりします。そういうふうに、しゃべりたいっていうことのなかにはもしかすると知恵を一緒にシェアしたいというか、そういう意識を持っていらっしゃる方が結構多いのかなとは感じています。

渡名喜　戸谷さんいかがでしょうか。これまでの活動から振り返って哲学対話のこういうところが意義だという点について改めてお聞かせください。

戸谷　そうですね。ちょっと河野先生と齋藤先生のお話に重なるところもあると思うんですが、私はどちらかというと主催者としてではなく一参加者として参加することも実はあります。それこそ齋藤先生や永井先生の哲学カフェにお邪魔したこともありまして、その節は大変お世話になりました。やはり自分が一参加者として参加してみて印象に残るのは、普段の仲間たちのあいだではわざわざ説明しないようなことを説明することになる、ということですね。例えば正義とか愛とか友情とかいう問題について、家族とか気心の知れた友達同士だったらそもそも一から説明しないような、当たり前だと見なしていることを、一から説明する。相手が自分と同じ前提

を共有していないということを念頭に置いて、手前のところから説明することになるので、全部を言語化しないといけなくなるんですよね。この言語化という作業、他者に伝わる言葉を考えるという作業自体が、自分の当たり前を揺さぶってくるんですよ。「あれ、これって本当に話の辻褄があってるのか？」って自分で不安になってくるんですよね。それがすごく難しいし面白い。もちろん、他者から今まで知らなかったような話を投げかけられることで常識が揺さぶられることもありますが、それだけではなく、他者に対して自分の考えを説明するというだけでも、自分が依って立っている「当たり前」、常識がいかに根の無いものなのかというのを痛感させられるんですよね。その、ある種の無力さみたいなものが、いったん対話のなかで出尽くして、「わかんないですね」ってなったところから、じゃあどうやって考えたらいいのかをみんなで育んでいく流れができてくると、僕はすごい興奮するというか、「おっ来た」って感じになりますね。もちろん対話の場を進行役がコントロールできるわけではないので、特に社会人の方を相手にしているとコントロールができないことが多いんですけど、できるだけ主催者としてはそういう流れができやすいような配慮というか場づくりをするように心がけています。だから逆に言うと、ひたすら自分のことを話し続ける方に遭遇したときにちょっと困っちゃうというのが長年の悩みというか、そこの立ち振る舞いが自分は勉強中だなと思っています。

渡名喜　もしかして、今おっしゃったことが、さっきご紹介くださった「技術」をテーマにした哲学カフェでの、専門家と一般の市民との関係ということにも絡んでくるんでしょうか。

戸谷　そうですね。ただ、この場に出て来ているのに申し訳ないのですが、「技術の哲学カフェ」について自分でやってはいますが、まだうまく「こういうものです」とプレゼンできない状態で、試行錯誤で動かしている段階です。道具とかテクノロジーとかの使い方っていうのは一通りであるように見えて実は使う人のライフスタイルとかその人の置かれている状況とかによって全く違った意味を持っているんだなというのが、技術をテーマにして哲学対話をしているとすごく痛感させられるところで。例えばこの前「料理」をテーマにして哲学対話したときに、あんまりこれはよろしくない話かもしれませんが、男性と女性の参加者で「料理をしなければならない」

というプレッシャーに対する感じ方が全く違ったんですよね。一例ですけど、男性の参加者の方からは、料理をしなければならないなんていうことはないじゃないか、そんな同調圧力は実際にはないんじゃないかというような発言が飛び出してきて、それに対してすごい女性の参加者から反論が来るみたいな。当然そうなると思うんですけど、同じような技術の営みであっても、それがどんな人がそれについて考えるかというか、当事者になるかによって、その意味合いというのは全く違うんだなというのに気づかされるのはすごく新鮮な経験です。

それから若干話が逸れてしまったら申し訳ないんですけど、オンラインをテーマにして哲学対話をしたことがあって、このときは本当にいろいろすごい発見がありました。例えばその時に出てきた意見で「なるほど！」と思ったのが、「オンラインでしゃべってると声の調節ができない」っていう意見です。例えば、いま僕たちが教室の中にいて車座になって話をしていたら、相手に届く声の音量でしゃべるんですよ。渡名喜先生まではこれぐらい離れているから、これぐらいの声だったら聞こえるなっていう、相手に届くような声量を調整して話すんですよね。だけどオンラインだったらデバイスでいくらでも音量を調節できるので、聞く側が音量を調節することができるので、しゃべる方は何もそれに対して配慮しないで語ることができてしまう。じゃあ、この配慮って対話の中でどんな意味を持っているんですかね、っていう問いかけが出てきて、なるほどと。実際に対面で話してる時は、単に話してるんじゃなくて声量をコントロールしてるんですよね。その声量をコントロールするということ自体が、何かのコミュニケーション的な意味を持っているというか、相手に対する一つの振舞いとして意味を持っているんだなぁってことに気づかされました。これはオンラインという技術の話をしてるんですけど、実はオンラインが登場する前の日常の方の対話の仕方について新しいことを気づく場にもなっていたりして、そのあたりの往復がとても面白いなと思っています。

渡名喜　オンラインと対面は何が違うのかというのは、私自身が専門とするレヴィナスという哲学者にも関わるテーマでもあるのでいろいろ考えさせられるテーマでもあります。では、永井先生、お待たせしました。これまでの活動からまた改めて哲学対話のここが

やはり意義ではという点について、お聞かせください。

永井　先ほど戸谷さんがお話しされてたことに本当に重なるんですが、私自身も哲学対話のファシリテーターをすることもあれば参加することもあるんですけれども、そこでの面白さは「他者性」に出会う機会だなというのを思っています。見慣れた他者がより他者であることがわかったりだとか、見慣れていたものが崩れていったりだとか。そしてやっぱり面白いのは、自分自身が一番「他者」なんだということに気がつく契機になるというか、「自分ってこんなこと考えていたんだ」とか、「全然うまく伝えられないんですけど」みたいなことがはっきりと感じられる、そのままならなさをそのままで生きるっていうのが哲学対話の醍醐味なのかなというのは思っています。本（『水の中の哲学者たち』）にも書いたんですが、よく哲学するとか考えることって、強くなるとか、主体的に考えられるとか、生き抜くスキルを手に入れられるなどと言われたりしますよね。もちろんその意義もわかるんですけど、一方で、哲学対話をするってすごく自分が弱くなったり脆くなったりする経験であって、その意味で稀有だと思うんですよね。他者に問いかけられて答えさせられてしまうとか、考えさせられてしまうとか、自分が世界に対してそのような自己であるということに気づかされるし、みんなでそれを味わうことができる時間だと思っています。それに、哲学は何も馬鹿にしないところが私は好きです。問いについても馬鹿にしないし、他者についても「そんなつまんない考えを言うな」とも言わない場なわけですよね、哲学対話って。そしてそれがいかに難しいかっていうことも同時に気づくわけで。「論理的なやつが勝ち」とか、「声が大きいやつが勝ち」というコミュニケーションはありふれていますけど、いかにそれが簡単だったかってことがわかるわけですよね。先ほど河野先生もスピークアウトはできるけどダイアローグができないっておっしゃっていたのもそれに近いと思いますが、勝ち負けを決めるのは私たちとても大好きで、わかりやすいし楽しいって思ってしまうんですけど、その反面で、ダイアローグすること、つまり弱くさせられることに耐えながら、それでもそれを続けるっていうことは本当に難しい。そうした難しさの中で、さっき言ったような、哲学は何も馬鹿にしないというところはすごく重要だと思います。哲学対話の場を開くと、「私なんかの意見が」とおっしゃる方っ

て多いですし、私自身もやっぱり思うわけですね。わざわざ手を挙げて、「正義について私こういうふうに思うんですけど」っていうことって、やっぱりすごく恥ずかしいし、私なんかのしょうもない意見でごめんなさい、となってしまうんですけど、哲学対話の場って、どんな考えも真理にとっては必要で、探求にとってあなたは絶対に必要ですよっていう態度が最初から開かれている場だと思います。

渡名喜　どうもありがとうございます。私も実は今この座談会を傍聴している学生の方と、つい先日「大人になるってどういうことだ」という哲学対話を行いました。その学生と私の「大人になる」ということについての意見が全然違って、逆に私が大人って考えていたものはなんて脆かったんだろうかと思わされる経験でもありました。その意味では、今永井さんがおっしゃったことはとても重要だと思います。

さて、この後は、哲学対話の問題点ないし課題点についてお聞きしたいと思うのですが、その前に、話し足りなかったことや、あるいは相互にお考えになったことなどはございますか。

対話とは

河野　そうですね。最初にお話しした点にも関わりますが、哲学対話とか「哲学」という形容詞を入れた方が宣伝になるし、形を作りやすいですが、「対話」自体が持つ力の方が「哲学」よりも強いのではないかなと思ったりするんですよね。私自身は、臨床的対話、例えばオープンダイアローグとか「べてるの家」の当事者研究とかいった要素を哲学対話のなかに取り入れようとしています。しっかり方法論的に取り入れているというよりも、色々な要素を何となく真似しているだけなのですが、やっぱりオープンダイアローグとか「べてるの家」における対話がもっている治癒力のすごさというか、「対話するだけで、どうしてこういうことが起こるんだろう」というほど、対話の威力は謎なんですよね。哲学というよりも、対話の持つ強さに魅力を感じています。実を言うと、哲学とは対話の派生物で、哲学があって対話してるのではなくて、対話があるからその派生物として哲学はできてるのではないかと思えてならないです。つ

まり対話の方が根源的じゃないかということですね。哲学を専門としている人は、何か「哲学は万学の女王だ」みたいなことをちょっとみんな思っているかもしれないけども、私の感じとしては逆で、対話の持っている根源的なコミュニケーションを引き起こす力に、哲学をはじめとした知は完全に依存していると思います。さっき戸谷さん、齋藤さん、永井さんもおっしゃっていましたけど、対話の身体性も含めて、そのコミュニケーションのもっている深さというのが哲学を可能にしているのであって、その逆ではないと思っています。臨床的対話も、その同じコミュニケーションの根源から人を治癒する力とか、人を結び付けることが生まれてきます。これは先ほど齋藤さんも永井さんもおっしゃっていたと思います。また、戸谷先生も、突然やって来た人たちが一緒になるということが起こるとおっしゃったと思いますが、この「人を結び付ける力」というのが対話の根本にある。その派生形態としてシチズンシップとかが可能となるし、哲学もある種の根源的な人の結びつきの一つの表現にすぎないのだと思います。ですから、私は順序が逆で、哲学対話でなくて「対話」で良いと思っているんですよね。ちゃんと対話するとそこから哲学が生まれてくるのだと思っています。

渡名喜　なるほど。今おっしゃっていることはまさに納得できます。ただ、いざ「対話をしましょう」というとき、今河野先生がおっしゃったような形で対話するのはなかなか難しくはないでしょうか。私としては、哲学対話は、非常に対話自体がしやすくなるようなセッティングを備えているという印象を非常に強くもっています。対話の際に遵守すべきルールや方針が明確に提示されているのが一つです。これは私自身が学生のときの哲学の授業の経験ですが、「対話が重要だ」っておっしゃる先生がいました。しかし、彼は何をやったかっていうと、「はい」と突然マイクを向けてきた。大教室で適当にランダムにあてた学生にマイクを向けて、「対話をしろ」と。ただ何か発言するとそれを否定するわけなんですけど（笑）。「それは対話じゃないだろ」って私はその時非常に感じました。ですから、今先生がおっしゃったことは全くその通りだと思うんですけど、逆に「哲学対話」は方法論的なところで、対話そのものを用意する作用があるんじゃないかと感じています。

河野　おっしゃる通りだとは思うんですけれども、一方で、書い

たものを読むということも、その経験が豊かな人は、対話もさせても深さがある感じがするんですよね。「読む」という、「書字」というものの持っている効果っていうのはどこから来るのか、何がそうさせているのか、というのはよくわからないです。最近はちょっとアフリカの哲学に関心があるんですけど、アフリカの人たちってものすごい話好きなんですよね。議論好きランキングみたいなのが世界にはあると思うんですけど、私はインド人かアフリカ人がチャンピオンなのではないかと思っています。アメリカ人がやや日本人よりも上で、日本とか東アジアの儒教圏の人たちが最もボトムに来るであろうというのが私の実感なんです。アフリカ人やインド人は、どうしてああいうふうにずっと議論できるのか、あの粘り強さっていうのが、なんというか、書き言葉に匹敵するような粘り強さなんですよね。そこを私たちは何もわかってないというか、書くことも含めて、「伝え合う」っていうことの持っている根源的な力についてまだ全然わかっていないと思います。その「伝え合い」から思考とかも出て来るのではと思います。

渡名喜　対話と書き言葉の問題は非常に重要な問いだと思います。ここで、ちょっと無茶ぶりかも知れないんですけど、永井先生、今の話についてお考えがあったらお聞かせいただけませんか。というのは、さっき永井先生は、自分のちっぽけな正義についての考えでも真理のために必要だとおっしゃったと思います。他方で、その作業は、自分自身の弱さを肯定することにもつながるとおっしゃった。その二つの関係はとても重要だと思います。その対話に参加した自分自身のためになるということと、それが真理のためにつながるというのが、もしかすると今の河野先生の話にどこかで関係しているんじゃないかという気がしたのですが、もし永井先生の方からお考えがあればお聞かせください。

永井　対話が根源で哲学がその派生物に過ぎないんじゃないかってお話ですよね。では、哲学対話がなぜ「哲学」対話と言われるのかといえば、それは問いを分け持つからだと思っています。哲学対話が、「対話」でありつつも「探求」であるということが、私にとってすごく刺激的でした。というのは、私はキリスト教系の高校に通ってたんですが、そこでの対話って基本的に分かち合いなんですよね。考えを分かち合うっていうようなもの。それに対し、わざわざ

「哲学対話」というときは、探求が行われている。互いの考えをケアしながらも、同時に真理をケアしているっていうような行いがそこでは現われているというのが、極めて重要なのかなというのは思います。とはいえ、対話がボトムというか、根幹にあるというのは本当におっしゃる通りだと思っています。

河野　今、永井さんがおっしゃったことはすごくポイントをついていると思うんですよね。先日、大分の高校で講演をしてきたんですよ。生徒さんが最後に質問してくれて、「お互い気にしちゃって、傷つけることを気にしちゃって話が弾まない、うまくできないときがあるんですけどどうしたらいいですか」って質問でした。そのとき答えたのは、こういうことです。私はいつもスポーツの比喩を使うんですけれども、テニスで、相手のことを気にしちゃってサービスに対してレシーブ返さないということがあれば、それはテニスに対する冒瀆になると思うんですよね。同じように、相手の言ったことに対して応答しないということは、真理に対する冒瀆で、永井さんがおっしゃったように、探求とは何かを共同で探究するという三項関係なのです。探究する対象、あるいは問いとかテーマというか、それが人と人を結びつけているのです。テニスが、プレーヤー同士を結びつけているように。その探究の対象という第三項がないから、相手と向き合うだけになって、お互いのことをすごい気にしなきゃならなくなるんですよ。そこが、対話をする上での重要なポイントではないかなと思うんですよね。例えば、企業なんかで厳しく問い合いができるのは企業には「営利」っていう第三項があり、それを前提に議論しなきゃいけない。そうした第三項がないと、向かい合ったときには傷つけるんじゃないかってお互いに先取りをしあってしまい、無限の気遣いを繰り返して何も言えなくなってしまうと思うんですよね。それに対して真理を追究する、あるいは問いを探求していくっていう活動のなかでは、やっぱりお互いの関係が変わっていくのだろうと思います。そこがやっぱり対話の重要なところだと思うんです。

渡名喜　テニスの例は非常に重要ですね。

河野　相手にサービス打たれた人がそのサービスを打ち返さず、拍手していたらもうテニスじゃないですからね。試合で相手に遠慮して相手の打ちやすい所に打ち返したらそれはもう相手に対する冒

瀆であり、かつテニスに対する冒瀆だと思いますよ。

渡名喜　しかもサーブのほうも僕はすごく重要な概念だと思っていまして、サーブって「奉仕する」ってことじゃないですか。つまり相手を打ち負かすための攻撃ではなくて、「はい、どうぞ」っていう奉仕。そして、それに対するレシーブという応答がないと対話が始まらないというのは非常に重要なことだと思います。

河野　そうですね。レシーブから始まるんですよね、実はね、対話ってね。

渡名喜　ちょっと今の話、私が今度授業などでレヴィナスの応答責任を説明するときに使わせていただきます。

河野　どうぞどうぞ。第一食堂で何かおごってくだされば、それで結構です（笑）。

哲学対話の課題

渡名喜　それではここらで、先ほど提示させていただいた、哲学対話の課題に移りたいと思います。もちろんこれは今何か問題があると私自身が考えているわけではなくて、皆さんがどういうふうに捉えてらっしゃるのかということを伺いたくて、テーマに設定させていただきました。齋藤先生、いかがでしょう。もし哲学対話の課題としてお考えのことがあればお聞かせください。

齋藤　おそらく一つには対話それ自体、対話の場をどのようにして進めていくかという問題と、もう一つは対話と哲学との関連、あるいはその周辺との関連の問題という、二つの問題があるように思います。まずは、対話を進めていくうえでの問題って結構さまざまあると思うんですが、例えばきわめて危険な考え方、許しがたい考え方のようなものが出てくるケースです。一方的に何か自分の考えだけを述べるだけでなくて、ある種の差別的な考え方とかが、発言は自由だからということで出てくる。こういう時にどう対処していくべきか、そういう問題が難しいなと思うときがあります。そういう発言に対して、ルールに則ってない場合は止めるっていうこともできますけれども、それ以外の場合にどう対処していくのか、対話の中でそれを回収していくべきなのか、あるいはそうではないのか

は悩ましいところです。この問題については、他の皆さんにもちょっと聞きたいところです。

それから、僕自身が今関心を持っているのは、そういう対話の進め方とか場の開き方ということと同時に、まさに伝統的な哲学と対話との関係には、先ほど河野先生がおっしゃっていたように、まだまだ考えるべき点があるんじゃないかなと思っています。これは以前に河野先生とご一緒したときに話題になったんですが、対話の形は、プラトンの対話篇のように、まさに哲学の始まりにあるんだけれど、伝統的な哲学のなかにも対話のさまざまな形がありうるだろう、と。例えば往復書簡のようなものだって、対話の形であったわけだし、そういうものも考慮に入れていくと、結構伝統的な哲学と哲学対話が接続できるルートっていうのは山ほどある。実際、渡名喜さんのご研究されているレヴィナスもそうですし、対話の思想って伝統的な哲学者のいろんな思想のなかに散りばめられているはずなのに、なかなかそれが浮かび上がってこない。むしろ伝統的な哲学とは距離を置こうとする傾向も、これまでの哲学対話の活動のなかでは結構あったんじゃないのかなと思っています。別に伝統的な哲学だけを大事にしろという訳ではないんですけれども、過去にも大事な遺産や、ヒントになりそうなものはたくさんあるので、そういうものにどんどん目を向けていくことも可能なんじゃないのか、そういう作業はできないだろうかとは考えてます。

渡名喜　どうもありがとうございます。今の点、いわゆる「哲学」っていうのと、哲学対話との関係っていうのは私自身の伺いたかったところであります。戸谷先生はいかがでしょうか。

戸谷　私からは二点考えてきたことがあって、一つ目は、これは本当に日々悩んでいることなのでぜひ先生方のご意見を伺いたいなと思っているところなんですが、哲学対話をいかに評価するかっていうことです。例えば大学の授業のなかに哲学対話を取り入れようとすると、不可避にシラバスを書かなければならず、到達目標とか、評価方法を書かないといけないわけです。そこに哲学対話を組み込んでいったとき、どうやって学生の成長を評価するのか。例えばパッと思いつくのは、積極的に発言できているとか、他者を理解できているとかだと思うんですけど、まず他者を理解できているかどうかは評価できないですし、積極的に発言しているっていうのは、発

言量で見れば評価できますけど、じゃあ沈黙しているのが良くないことかと言われたら、そうでもないわけですよね。別に最初から最後まで黙って参加していてもいいわけなので。実際に哲学対話の評価方法としては、車座になってもらって後ろに一人ずつ立って、目の前にいる人がしゃべっている様子を評価するという手法もあるらしいんですけど、個人的な感覚としては、教育のなかで哲学対話を評価すること自体が自由に思考することを阻むような気がしています。なので、大学の授業のなかに哲学対話を組み込んでいくときに、それをいかに評価する手法があるのか、というのは個人的には思います。しかも、このことを疑問に思った時点で、「そもそも教育って評価しないといけないのか？」ということにも当然行き当たるわけですよね。しかしシラバスは書かなきゃいけないみたいな葛藤もあって、なんというか、何重の自己欺瞞みたいなものに日々苦しんでいるんですが、そのあたりが課題だなと思っているところが一つです。

以上は学校のなかの話ですが、もう一つは、社会で哲学カフェをしていくときに、今はオンラインでやることがすごい多いんですけど、そのときに私は基本的にはカメラはオンでもオフでも構わないっていうふうに申し上げていて、参加者の方に委ねていいます。カメラのオンオフにかかわらずかもしれませんが、その場にいるのがどういう人物かわからないというか、相手が自分の言葉をどう受け取るかということがやればやるほどわからなくなっていて、怖くて何も発言できなくなっていく自分がいるんですね。例えばいま渡名喜先生は、ご自宅っぽいところにいらしているんだろうなと思っていますが、もしかしたら、渡名喜先生のすぐ近くに誰かほかの人がいるかもしれないですよね。例えばお子さんや配偶者の方がいらっしゃるかもしれなくて、そういう可能性を考えていくと、迂闊な発言ができなくなっていく。言葉選びに慎重になり過ぎて、なかなか、どんなことを言ったらいいかわからなくなって、結果的に黙っちゃうみたいなことが、僕は結構あります。カメラがオンであればそれでもまだ推測ができるんですけど、例えば、今このzoomの画面上に映っている「SのiPhone」さんなどですと、もう全くどういう人物かわからないわけですよね。僕の言葉をどう受け取るかもわからない、そこからどんな印象を受けるかもわからない。そうすると、

すごく平板なことをつい言ってしまうというか。実際に、オンラインの哲学対話ですと、スタートした直後から前半戦にかけて、ちょっと平板で当たり障りのない話が行き交ってしまうことが多いなぁ、という印象があります。オンライン上で相手の匿名性が高くなっている状態で、どうやって深い対話をしていくのかっていうのも、個人的には課題だなと思っているところですね。以上の二点ですね。

渡名喜　ありがとうございました。僕はたまにこの足下に赤ん坊がいて、子守をしながら足下でバウンサーという揺れる椅子を揺らしながらオンラインで話すことがあるんです。今日はいませんが(笑)。おっしゃるとおり、オンラインか対面かっていうのは哲学対話に限らず我々この2年くらい授業の中でひしひしと感じていることですよね。永井先生いかがでしょうか。

永井　そうですね。齋藤さんがおっしゃったところにも重なるんですけれども、哲学対話がマジョリティのためになってしまうことはあると思います。私の「生き生きとした探求」が誰かを踏みつけた上でなされている可能性を常に持つのが哲学対話なので、そこが本当に難しいところだと思っています。哲学は探求の場ではありながら、それはちゃんと対話ってものに支えられてて、「みんな」で真理を探究しなきゃいけない。文脈は異なりますが、「みんなで達成するか、さもなくば達成しないか」という好きな言葉があるんですが、近いものを感じるんですよね。誰か特定の四人くらいが、誰かを踏みつけながらすごく生き生きと哲学して、「いや、今日深まった」とか言って帰っていっても、全然それは意味がない。「これは哲学だからいいんだよ」と開き直ってしまわないように、どうやってそういう場をつくっていけるのか、それは私自身の課題でもあります。あるいは、哲学対話っていうものを世に発信する機会も多いので、その時にある種の難しさ、危険性っていうものをどうやって損ねないままに伝えることができるのかっていうことには悩む日々です。

渡名喜　今のお話は私が哲学対話とは違う文脈の中で考えていたことにもつながるかもしれません。まさにプラトンの『国家篇』の一番最初のところで、ポレマルコスがソクラテスに「議論に参加したくない人にどうやって説得しますか？」と問います。つまり「哲学対話やります」ということに対し参加してくださった方々は、そ

れに最初から「参加する」って言ってくださって参加すると思うんですけど、「いや、参加したくない」っていう人って、特に大学では結構いると思うんですね。哲学対話の授業に来る人たちは参加したいとは思っている。もしかすると、参加したくないっていう人でも、オンラインだったら参加できるという人もいるかもしれない。そういう議論に参加しにくい方をどう対話に取り込むか、あるいはそもそも取り込むべきなのか否かも気になっています。

哲学対話をどう評価するか

河野　ちょっと話戻しちゃって申し訳ないんですけど、評価の問題なんですけれども、戸谷さんは真面目だなぁという感じがして、私は適当にシラバスに書いて、適当に成績付けている人間なので、そんなに真面目にやる必要があるのかっていうのが、まずそれが第一の解答です。この「いい加減さ」が正解だと私は思ってます（笑）。適当に生きたらどうでしょうかっていうのが一つの提案ですね。就職活動のときには、「この成績、適当な先生が、適当につけているので、信用しない方がいいですよ」と面接されている皆さんに言ってくだされば それでいいんじゃないかなぁと思ってますけど。学部長としては失格の発言をいたしましたが、真面目に言うと、評価というのは一元的にする必要はないので、生徒や学生自身が自分で、自分の活動に対して、どのような評価をするのかっていうのを考えて、自己評価してもらうことが大切だと思ってるんです。自分はここから何を得ようと思っているのかを考えてもらって、その学びによって自分はどのように変化をしただろうかというようなことを、いわば自分の変化の方向性を検知させることが評価の最大の目的だと思うんですね。これが真面目な第二の解答です。ただ第一の解答の方が圧倒的に有効ですので、それをぜひ実践されるといいと思います。

それで、話さない人についてですが、そういう方たちは、言葉が奪われているっていう状態になってるんだと思うんですね。ただでも、それは日本的なことだなぁとも一方で思うんですよ。よく哲学対話で言うハワイ式かヨーロッパ式かっていうことがあります。ハワイ式ってみんながインクルードされてそこにコミュニティを作る

ことが第一の目的だという考え方だと思います。もう一つ、ヨーロッパ式はどっちかというと自我のしっかりした子を作るという、質疑をしっかりとして誰に対しても向き合っていくっていうような感じの、対決とは言わないけど対面的な子を育てるっていうような考え方に立っていると思います。例えばオスカー・ブルニフィエなんかはそんな感じの考え方ですよね。彼は、そのあまりに厳しいやり方から、いろんなところから批判されます。私も彼は少しやりすぎかなと思うのですが、ただ一方で彼が目指しているところもわかるのです。多分ヨーロッパやアメリカに留学した人はそういうふうに感じると思うんですけど、何かの発言をして、その場に貢献しなければ存在していないのと同然と思われてしまいます。哲学対話では、発言できない人には何かでカバーしてあげなきゃいけないなぁと思うのと同時に、逆にその人はもしかすると、何もしなくてもその場に居続けることに甘んじて、そうした抱擁的な場所にしか居られなくなるのではないかと思うのです。何も言わなくてもその場にいてよいと思っているというのは、もしかすると、その場にいる他の人たちに依存してしまっているのかもしれないとも思うのですよね。そうなると、その場において責任ある立場に立ちえないのではないかと思うのです。ですから、私は気持ち的には揺れますね。そういう人たちには、表現できるように場を整えてあげなければならないと思うと同時に、自分を表現しなければ、逆に他の人に気遣いさせてしまっているんだという点にも気づいてほしいとも思うのです。しゃべらないことによって他の参加者に気遣いさせているわけです。しゃべり過ぎる人も気遣いさせちゃってるのだけど（笑）。全然しゃべらないで帰っていっちゃう人も、永井さんに気遣いさせてると思うんですよね。ご本人たちは、人が自分に気遣っているのだという点に気づいてないんじゃないかなって思うところがあります。ですが、この問題に関しては、私も考えが揺れていますね。ちょっとまだ考え中のテーマです。半分冗談、半分本気で言うと、哲学カフェでは、「おしゃべりおじさんと寡黙女子」っていう組み合わせが多いんですよね。やたらしゃべるおじさんと、黙り込んでしまう女性っていう場面が、しばしば状況として生じると思うんです。これをどうしたらいいかというのが、いつも私のテーマです。こうした傾向は、子どもの頃からあって、おしゃべりな男の子と黙っちゃう女の

子っていう状況が、特に小学校5、6年生から、ジェンダーを意識するようになってくると出てくるのです。4年生までは、話す話さないは個性の問題であって、ジェンダー差はあんまりないのです。この偏りをどういうふうにしたらいいのかなというのは、結構、深刻な問題です。「女の子がしゃべりにくいのでは、その場のあり方が駄目じゃないか。他の人に問題があるのではないか」とも思うし、逆に話さない女の子に、「全然話さないのは、逆に人に気を遣わさせちゃってるんだよ」とも言いたい気分もちょっとあるんですね。だからここは難しい問題です。まだ解決が得られてないし、まだ私の考えに偏見があるのかもしれないです。

渡名喜　それは面白い論点ですね。戸谷さん、何か応答なさりたいことがあるんじゃないでしょうか（笑）。

戸谷　そうですね、いろいろあるんですけど（笑）。先ほど河野先生からアドバイスを頂いてありがとうございました。とても参考になりました。ちょっと背景をお話しすると、僕の大学ではそもそも哲学科がないので、「哲学って必要あるの？」みたいな問いに答え続けないといけないんです。そうすると、「哲学対話をするとこんないいことがあるよ」「学生がこんなに成長しますよ」ってことを言いたいんですよ。ただ、いわゆる量的な評価指標というか、資格のスコアのようなものに結び付く能力開発を目標にすることができないので、それで先ほどのような質問が出てきたわけです。ただ、そうですね。学生自身に評価軸を作らせるということですかね。ちょっと参考にさせていただいて、引き続き研究していきたいと思います。

河野　言われてもクビになんないから大丈夫ですよ。

戸谷　いや、それはわからないじゃないですか（笑）。

永井先生と河野先生のそのあとのお話というか、課題感というのは、私もすごく共有するところでして、先ほど応答の話が出ていたと思うんですけど、無視をすることっていうのも応答の一つなのではないかと思っています。例えば誰かがすごく真剣に何かを問いかける場に対して、あたかもそれがまるで価値がない問いであるかのような態度を取るっていうのは、それ自体が一つの問いに対する応答になっていると思うんですよね。いわゆる「哲学対話の授業」というふうになると多分哲学対話がしたい学生が来るので、そういう態度を取る学生はあまり来ないんじゃないかなと思うんですけど、

不特定多数の、それこそ100人とか200人とかいる授業で哲学対話をしようとすると、どうしても消極的な学生が出てきて、消極的な学生が介在することによって、それだけで対話がしづらい雰囲気ができてしまう。場が硬直してしまうっていうことがあります。この状況はいかにして打破したらよいのかっていうのは、僕もすごく悩んでいるところですね。

渡名喜　ありがとうございます。齋藤さん、何か今までの大学での実践ですとか、社会での実践から、何か今のことについて思うところはございますか。

齋藤　そうですね。評価については僕もまったく河野さんと同じで（笑）、評価は「しない」というのが基本だと思っています。それで、特に今戸谷さんが言われた問題は、僕もしばしば感じることで、授業の形態によって、あるいは学生さんの数によって、対話がしにくくなるというところはあります。わけても、数が増えれば増えるほど対話ってしゃべれなくなる。特にオンラインの環境下だともう全然しゃべらない、カメラもオンにしない、黒い画面にただ名前が出てるだけっていう、そういう学生が一時期増えたんですね。それで、「何でしゃべらないんだろう」っていうことについても彼らにしゃべってもらいました。そうするとしゃべれない子たちもしゃべってきたりする。「これこれこういう気持ちだからしゃべれない」みたいな。「全然顔も知らない人の前でしゃべるなんてそんなのできるわけないじゃない」っていう至極当たり前の意見が出てきたりします。でもそういう時にようやくしゃべっている学生たちが自分たちのなかで気がつくんですね。しゃべりたい学生だけがしゃべっていて、そうじゃない学生のことをどこかで既にしてないがしろにしている、あるいはそういう場に参加したくないような場を作ってしまっているのかもしれない、と。そういうことを対話をとおして彼らに考えてもらうというのも、一つのやり方としてはあるんじゃないかなというふうに思います。

ファシリテーターの役割

永井　私が最初にマジョリティっていうふうにお伝えしたのは、

もちろん今の話にも重なりはしますが、想定してたのは次のような場面です。例えば、実際にあったというわけではないですけど、「人を好きになるってどういうこと？」について話す時に、異性愛を前提にした議論がずっと進んでそれで終わってしまうっていうようなことって全然あるわけですよね。その場に、セクシャルマイノリティの参加者がいたときに、「あ、この場は自分の場じゃなかったな」っていうことをただ痛感して終わることって、往々にしてあることだと思っています。そこで、自分の当事者性を出さないと、みんなが前提としている場が崩れない、みたいなこともある。そうすると、本人がすごく気負い過ぎちゃって、「あ、これ自分がカミングアウトしなきゃいけないのかな」とか。でもあまりにもこのままだと異性愛が問題になり過ぎちゃって、このままだとどうだろうな、でもここに「そういう仕方じゃない愛もありますよね」って言った時に、「え、何で？」って問われたらどう答えよう、とか、いろいろ考えてしまう場って多いと思うんですよ。もっと言えば「異性愛しか愛ではない、それ以外は悪である」のような差別的な考えが共有されて進んでしまうこともある。じゃあ、そうではない場をデザインするとなれば、もちろん参加者の意識もそうですけども、教育の場だったらファシリテーター、教員が本当に注意しなきゃいけないところでもある。だからといって、もちろんそこに正解はないですよね。「どんどんオープンに話そうよ」としてしまうのは一つの悪手だし、「当事者の意見聞かせて」と本人に無理やり話させてしまうこともあるかもしれない。こういう時にどういう場であるべきなのかっていうのは、文脈にも場所にも誰が参加しているかにも依存して、「これだ」っていうものもないし、それぞれが苦しんでいるところなんじゃないかと思っています。

渡名喜　そうするとやはりファシリテーターの役割が重要になりますね。今おっしゃったような場をデザインすることができるようになるためには、どうしたらいいのでしょう。やっぱりファシリテーターはたくさんの経験を積むということなのでしょうか。

永井　本当に難しいですよね。哲学対話のファシリテーターを考えるとき、私はいつも知識とスキルと態度に分けて考えています。よく言われるのは、知識の部分です。「哲学対話のファシリテーターをするのに哲学史を勉強した方がいいでしょうか」とよく聞かれ

ますよね。もう一つは、スキルで、概念をうまく整理できるとか、論理的思考ができるとか、そうしたスキルをどう訓練するか、議論になる。これら二つは重要ではありますが、哲学対話のファシリテーターを考えるときには、わたしは「態度」を一番重要視しています。それは、単純さに飛びつかず、わからなさや複雑さに知的に耐えられるとか、探求の場が、考えるためにみんなが大丈夫な場であるかについて常に緊張し続けられるとか、そういったことです。ケアの態度ですよね。誰かの考えをケアしたり、真理に対してもケアしている態度を持ち続けるようなことです。このあたり、齋藤さんはどういうこと考えていらっしゃるのか聞きたいなと思いますがいかがでしょう。

齋藤　確かに今おっしゃったところだと、何というか勘所みたいな、すごくあやふやな所になりますよね。学生に例えば「対話が進まないのはしゃべらない人がいるからだ。じゃあしゃべらない人の意見聞いてみましょう」って言ったとして、これってやっぱりすごく圧力になることだと思うんですよね。でも、「何でしゃべらないんだろう」みたいな疑問自体は出てくる。それに対して、「いや、僕はしゃべりたくないんだ」っていうような意見が、直接にはしゃべれなくても、たくさんオンラインでの回答フォームには寄せられてくる。もちろん匿名扱いにしますが、そういう回答がたくさん出て来てますよ、っていうこと自体を開示するだけでも意味があると思います。強制的に対話の場を開くというか、対話の場で何が問題になってるのかを、直接的な対話の場以外で出てきた意見からみんなでちょっと考えてみようということです。こういうやり方は、先ほど永井さんが言っていた真理のケアに重なるように思います。対話の場以外で出てきた意見ともバランスを取りながら、「じゃあこの問題、こんなふうに考えてみましょう、こういうところもあるかもしれない、ああいう問題も出てくるかもしれない」みたいなところを指摘するというのは、ファシリテーターが圧力から思考を守る部分と、それと同時に思考がなお考えるべき問いを投げかける部分とを常に同時に鋭く意識しておかなければならないところだと思います。その点では僕自身も永井さんがおっしゃる通りだと感じています。

河野　あの、永井さんは知ってるかもしれないけど、私は結構、

発言を待って圧力をかける方なんですよね。

永井　よく知ってます（笑）。

河野　自由にしゃべるよりも、均等にしゃべることを重んじています。話すと自分が傷つくような、本当に話したくないことは話さなくていいんですけども、考えがまとまっていなかったり、言葉が見つからないでいる場合には、「もっとゆっくり考えていいよ。みんなはもっと待ってあげて」って感じにしますね。なぜそうするのかっていうと、さっき言ったみたいに、しゃべりたい人だけがしゃべると一方方向にだけ進むんですよね。これを避けたいからなんです。前提を問い直す、積み木崩しみたいなことをやりたいので、積みあがったらすぐ足下を問い直すことをやりたいのです。他のしゃべってない人が発言することがしばしば前提を問い直すきっかけになるので、だから、結構待つんです。発言するまで待たれるのは、ある程度、本人には苦しいかもしれないけれども、本当に嫌がってるのだったら態度に現われるので、その場合には無理はさせないです。ただ本当のところはどうなのかはわからない。先ほど永井さんが、自分が何かで傷つけるかもしれないと言いましたが、それは最終的には誰も知り得ないことだと思うんですよね。例えば、永井さんは、私が宇宙人であることを未だに気づかずに、地球人の話ばっかりしてる。私はずっと齋藤さんにも永井さんにも心を傷つけられてきてるんですけれども（笑）、これは誰も気がつかないわけじゃないですか。だから、ありとあらゆることを配慮することは無理だと思います。

そこで、私はよく仮定の話をさせることをしますね。フィクションとして語ってもらうのです。卒論とか修論とかでも自分自身のことをテーマにしたいけど、直接話せない、書けないっていう人が出てくるんですよね。そうした場合には、あたかも自分のことを第三者であるかのように書くように示唆しています。もちろん細かい点に変更を加えて、アバターみたいな形にした自分について書く。その距離感の取り方が大切で、対話っていうのはそれを学ぶ場じゃないかと私は思うんです。対話は結局、全部演劇なんじゃないかと思います。「本当の自分」なるものがあって、それを話すなんてことは原理的にありえないのではないでしょうか。対話では、何か演じてもらっている、アバターを前に出して話してもらっているのだと思

っています。それは、あるポジションを取ってしゃべってもらうということです。ディベートもその形かもしれないですけど、哲学対話って自分と似たアバターをたくさん作る、そして自分を複数に分裂させていくゲームだと思うのです。ですから、発言をじっくり待つのは、発言者に自分を分裂させるためにやっているわけです。自分について語ることは、自分を対象化することであり、自分について反省することは自分のアバターを作ることだと思います。語られた自分は、何かの形で自分から切り出されたものなので、残った残余の自分と対象化された自分とが分かれるのです。しかし、こうした切り出しによって、自分は自分から自由になっていく、語られた自分、作られたアバターのどれでもないというかたちになって自由になっていく。そのどれが本当の自分なのかわからない浮遊感を持つことが、自分を解放する上ですごく大事だと思うんですよね。ですからそういう演劇性、あるいは、ゲーム性というかプレイ性というか、そういったものを学ぶ場が、子どもの哲学であると思っているのです。

渡名喜　今の話はすごく面白いですね。演劇化するといろんな自分を演じられるようになるというのは目から鱗の話でした。すみません。戸谷さんがそろそろ退席しないといけないということなので、戸谷さん、言い残したことがございましたら最後におっしゃっていただけないでしょうか。

戸谷　はい。今思っていたのは、河野先生のお話っていうのは、「なるほどそういう考え方もあるのか」というふうに思ったんですが、その一方で、河野先生が熟練しているからこそのお考えのようにも感じました。対等に話させるという手法を「じゃあそうすればいいんだ」と思って誰もが真似してしまうと、すごく問題が起きるような気もしています。なのでやっぱり齋藤先生がおっしゃるような勘所というか、経験を積むことで身に着けていくセンスというようなものは必要なのかなという気はしています。私自身も何回か、永井先生がおっしゃるようなマジョリティが押し切っていってしまうような哲学対話を進行したことがあって、終わった後でマジョリティに属していないほうの方から「実は嫌な思いをしました」とおっしゃっていただいたことがあって、やっぱりそういうのを聞くと落胆するんですよね。別に僕の責任ではないのかもしれないんです

けど、もしかしたら回避することができた苦しみを作ってしまったのではないか、という感覚がありました。そういう場面に直面して、それでも開き直ることもできるのかもしれないんですけど、やはりファシリテーターとして、どうやってこの場に期待を寄せて来てくれた人に、その気持ちにそれこそ応答するか、答えていくかっていうのは、すごく僕も悩んでいるところでした。

それから、大学における哲学対話についてですが、一つは、例えば、15回の授業のなかでテーマが大きく変わるタイミングで、哲学対話を取り入れることが有効だと思います。例えば倫理学を扱っているなかでも、いわゆる規範倫理学から応用倫理学に大きく話題がチェンジするときに、ブレインストーミング的に一回は哲学対話をやってみて、その後へのモチベーションを高めるっていうか、そういうかたちで使うことが私は多いです。それから、哲学教育からやや離れるんですけど、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）でも哲学対話は有効だと思います。例えば企業と提携して問題を解決するタイプの授業でしたら、そのときに企業が抱えている課題を分析していくときに、「そもそも価値ってなんだろう」とか、「そもそもサービスって何だろう」とか、そうしたことについて哲学対話的なことをしてみると、認識やアイデアを共有できます。永井先生が企業での哲学対話を実践されているとおっしゃっていたんですけど、たぶんそれに類するような効果があるのかなと思っております。すみません、ちょっと駆け足でまとまらないままお話ししてしまったんですが、実は9時に校門が閉まってしまいまして、閉じ込められてしまうリスクがあるので（笑）、お先に失礼させていただければと思います。今日は貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

哲学対話の身体性と演劇性

渡名喜　こちらこそどうもありがとうございます。そうですね、皆様もお忙しいと思いますのでそろそろこの場も閉めたいと思っていて、ぜひせっかく傍聴に来てくださった方々にも、もし感想やお考えがあればと思っています。傍聴の方の中に、立教大学の兼任講

師で「哲学対話 in Rikkyo」も担当なさっている鈴木信一先生がいらっしゃいます。鈴木先生、何かございますか。

鈴木　今日はありがとうございました。特に河野先生は、テニスや演劇性と哲学対話が非常に似ているというか、近いものであるとお話になっていました。私は障害のある人たちと即興ダンスによるセラピーをやっていますが、実は私も同じようなところを感じていました。最初は感想になるんですが、哲学対話において言語化するということは、即興ダンスにおいては動きを生み出すということになると思います。発達障害を持つ人たち、とくに私の関わる人は重度の人なので言語がほぼ使えない人が多いんですけれども、ダンスセラピーで踊っている発達障害があってワンセンテンス話せるかどうかわからないという人たちも、実は他者といかに関わるかとかですね、日常の動きと踊りの動きはどう違うんだろうとかですね、そういうテーマを自分で抱えて動いてると思うんですね。それで、他者と関わる、どう関わればいいんだろうということをずっと繰り返している。だから、ここで言語について主にお話しされているんですけれども、言語が使えない人たちにとっても、実はこれも、例えば即興ダンスで踊るっていうのも、ほぼ同じ趣旨を持っているのではないかというふうに私は感じました。それから、先ほど戸谷先生がおっしゃっていたオンラインとの関係なんですけれども、実際、言語活動と身体活動っていうのは非常に似ていて、相手の表情であるとか、相手との隔たりとかによって言語活動はどんどん影響を受けるわけですね。そういうことについて、やっぱり難しさがあると私は授業の中でファシリテーションをさせていただきながら思っています。先生方で、哲学対話の内において身体運動がどのように関わっているかについて、何かお考えをお持ちでしたら伺いたいと思いました。

渡名喜　ありがうございます。この点は特に齋藤先生、結構授業の中で体を動かすことを積極的に取り入れてらっしゃると伺ってますが、どうでしょう。

齋藤　はい。大人数の授業では対話とレクチャーを組み合わせるかたちでやっていますが、ゼミの方では数年間にわたって演劇と哲学対話を組み合わせるかたちでやってきました。そこで気がついたのは、先ほど河野先生がおっしゃられたある種のフィクショナル性

というのもありますし、今鈴木さんもおっしゃられた身体性っていう部分もあります。つまり誰かの役になり切って誰かの台詞を語るというやり方です。他人の言葉を本当に自分のものとして語るとか、あるいは他人の言葉を語る者がどういう振舞いをするのかっていうのって、結構すごい深い問題だと思うんですね。それは、その言葉のメッセージ性っていうのはいったい何なのかっていうことを、まさに一回おなかの中に入れつつ、だけどそれとも距離を持つっていうことです。それは哲学的な思考と、あるいは対話的な思考ときわめて類似したところがあると僕は思っています。学生たちは台詞を当てられて演技をするっていうのをやりましたし、自分たちで脚本を作るっていうこともやったんですけれども、そこで間合いであるとか、あるいは身体の振舞いというのは何を表現するのかっていうことに対する意識も鋭敏なものに変化しました。それは大きく効果があったなと思っています。通常の哲学対話からすると飛び道具的なものですけれども、そういう成果はありました。

鈴木　やっぱり即興的に受け答えしている人と、よく考えて本当に役割を担う形でしゃべっているような人とでは、同じことをしているとは思えない。ただ、演劇でも即興演劇と台詞をしゃべる演劇ってありますよね。哲学対話のなかでも、その場で即興でやるという部分もありますが、即興性とストーリー性についてはどのように思われますか。

齋藤　脚本がある方が非常に安定性が高いっていうのはありますけど、でも同じ脚本でも一つとして同じ演劇ってないじゃないですか。まさにそこは即興性というところがあって、そういう即興性が非常に高くなっていくのが、鈴木さんがおっしゃられたような即興演劇みたいな、あるいは即興のダンスみたいなそういうものなんじゃないかって思います。とはいえ、対話はやはり即興的性格を持っているとは思います。

渡名喜　他の方でいかがでしょう。これをしゃべっておきたかったとか、あるいはこの一連の議論の中でお考えになったことなどがありましたらご発言ください。

河野　対話以前に、知らない人に話しかけるテクニックというのを持ってない人が多いので、そうすると対話は厳しいですよね。それは哲学対話とかいう以前に、コミュニケーションの形式が硬いの

だと思うんですよ。多くの人は、知らない人にパッと声をかけることができないのかもしれません。この間、駅で大騒ぎしている人がいたんですよ。そこにパッと声をかけるとその騒ぎが止まるんですよね。最近、聞いた台詞では、「見知らぬ人に声かけられないじゃないですか」っていう発言が私にとって一番衝撃的で、そうするとどうやって生きているのかなっていう気がするんです。何か話しかけるということについてのこれだけ強い抵抗感というのが社会の中に蔓延していて、人にしゃべりかけることができないというのです。なぜそうなっているのかについては本気で考えるべきなのですが、その一つの理由に、自分が何かの形で常に評価されているっていう意識があるんだと思うんですよ。さっきの話と逆になりますけれども、一対一の関係性である「やあ、こんにちは」っていう行動に対しても、必ず三人目によって評価されているっていう意識が変な形で入り込んできていると思うんです。いつも誰かからの評価を恐れていて、だから「自分がうまくいっているだろうか」といつも気にしなきゃいけない。挨拶して相手がニコニコしていたらうまくいっているんだ、という単純なやり取りができなくて、表に出ている表情から、その裏に何かあるんじゃないか、それともまだ何かいいことがあるんじゃないかという意識しすぎな気がするんですよ。第三項の入り方っていうのは私たちの社会の中で考えるべきです。相手と対人関係に入る前に外部からの評価が気になりすぎていて、入ったら入ったでその場の人間関係の外部がなくなってしまう。哲学対話をやっている方たちの中で、ファシリテーターの役割の重要さってよくおっしゃる方がいらして、それは真面目なことだなぁと感心するのですけど、私は、対話が失敗したら均等にみんな悪いんだと思っているんですよね。だって、そうじゃないですか。こっちが100万円もらっていたら、それは相当責任持ちますよ。でも、哲学カフェとかで、タダで集まって人の話聞いてね、それで喜んで帰ろうなんていう虫のいい話なら、もうちょっと場作りに貢献したらどうなんだって思うんですよ。「あんたたちタダで来ているのだったら、それなりに他の人に貢献したらどうなんすか」みたいに思うんですよ。子どもに対しても率直に言うんですよ。「タダってないんだよ、この世の中」みたいなね（笑）。「交換しない社会なんかないんだよ」なんてことを言ってですね。だから対話ってみんなで作る

ものであって、ファシリテーターが全部責任を持つということはありえないと思うのです。何か、時代劇みたいに敵に囲まれて、20人ぐらいを、一人で相手にするとかありえないじゃないですか。対話はみんなでやるものです。だから、失敗はそんな気にしてないんですよ。まあ私の性格の不真面目さっていうのも主な要因なんだろうと思うんです。だけども、「失敗したのは君たちのせいでもあるからね」っていうふうに考えています。「つまんなかったら君たちのせいでつまんないんだ、俺もつまんないよ」みたいな（笑）。怒って帰っちゃうつもりでいると、プレッシャーになってみんなその場に貢献するのですよね。

渡名喜　ありがとうございます。それでは私も、学部長の今の言葉で非常に強い後ろ盾をいただきましたので、せっかく来ていただいた学生の方、いかがでしょうか。聞いていらっしゃいますか。しゃべりにくいか今のタイミングは（笑）。Sさんいかがでしょう。

学生S　そうですね。どうしても哲学対話っていうのになった時に、対話が苦手な人だとか、苦手だと思い込んでしまっている人が、そういうハードルをどうやって乗り越えるのかなっていうのは私も聞いていて思ったところです。それから、これは若干個人的な興味も混じってしまうんですが、河野先生が、図書館とか美術館で哲学対話をなさっているとおっしゃったと思うんですが、それについてもう少しお話をお伺いできればと思っております。

河野　せっかくですからコンパクトに説明したいと思います。図書館の場合はですね、いくつかのやり方があります。今江戸川区の篠崎子ども図書館では、図書館の二階で哲学対話をやっています。例えば「今日のテーマは算数です」みたいにテーマを決めて、問いを出してもらって、例えば「数とは何か」みたいなことを話したあとに、次に下の図書館員の方が上がってきて、算数や数学、数に関する本を紹介して、子どもに借りていってもらうというやり方です。つまり、対話したあとの、もうちょっと探求したい部分を本で埋め合わせて、図書館の人に本の説明をしてもらっています。他の場合では、単純に対話の場所として図書館をお借りしている場合もありますけれども、江戸川区のように、図書館員の方による図書紹介との組み合わせでやっている実践が多いです。あとSDGsなどについて、図書館で調べてもらったことをもとにして話し合うこともある

し、絵本を読んで図書館員の方から簡単な解説をいただいてから話を始めるということもあります。美術館も同じですね。学芸員の方にいったん「この絵はこういう意図で描かれています」みたいな解説をしてもらって、その後にみんなで学芸員の方も含めて対話をするという形ですね。これは割とやりやすいです。やっぱり対話が弾むには、当たり前だけど題材がいい方だと思うんですよね。プレーンバニラ[4]みたいな、素材がない形で対話を続けていると、同じメンバーで繰り返していくとみんな飽きちゃいます。何回かやっていると話す内容が無くなっちゃうんですね。人間、悩みってそう多くないんだよね。だいたい二つぐらいしかないんです、人が悩んでることは（笑）。20個も30個も悩めっていうのはなかなか難しいんだよね。だから題材があった方がいいんですよね。

（2021年11月　オンライン会議システムzoomにて）

［**注**］

1　市民が公的な事柄について積極的に関わっていくこと。
2　「なぜなぜ攻撃」とは、河野ゼミのテクニカルタームで、ある発言に対して何度も「なぜ」とその理由を繰り返し質問して、思考を掘り下げていく質疑応答のこと。ニコニコしながら「それはなぜですか〜」と聞くことがルール。
3　哲学対話で使用される柔らかい素材でできたボール。これを回して、保持している人が発言することができる。発言してほしい人にトスすることになっている。
4　話し合いのテーマから参加者皆で決めていくこと。

Beyond Boundaries: Comparative Civilizations Now 22 (Feb. 2022)
Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University